

津山の城下町での自然の脅威といえば、まず洪水があげられます。壮大な津山城の築城とともに進められた城下町建設。その中で城下町を洪水から守る堤防の建設は、欠かすことのできない重要な課題でした。

しかし、このようにして築かれた堤防も長い年月の間には、水流によって壊されてしまう恐れがあります。そこで、堤防に当たる水流の力を分散させたり、流れを制御したりするための工夫がなされました。その1つが、当時の一般的な言葉では水剣^{みずつば}、現在では水制とか沈床と呼ばれる、堤防から川の中に張り出した構築物でした。

この構築物は、地域によつて形や工法も異なり、また呼び名も様々ですが、江戸時代の津山では「なげ」と呼ばれていました。このなげが最初に造られた時期は確定できませんが、津山郷土博物館に所蔵している城下町の絵図資料からは、少なくとも森時代の終わりごろにはあつたことがわかります。

津山の「なげ」は、吉井川の北岸堤防から突き出して設けられた、少しとがった山椒魚の頭のようないい、あるいは先が丸くつぶれたかまぼこのような形をした大きな石組みでした。なげとなげの間隔は様々で一定ではありませんが、なげの近辺には緩やかな流れのよどみができるので、堤防から下る雁木^{がんぎ}（石段）が設けられたり、船着き場に利用されたりすることもありました。



▲小田中で確認される「なげ」

どうかは不明ですが、大きさや形が自由に設定できる利点があります。

ただ、こうした大切ななげも、その維持管理はたいへんだったようです。一例をあげれば、東新町と西新町の南には、吉井川の土手までの間に八出村の田畠がありました。これが村と町との境界をあいまいにすることとなつたため、土手の石垣やなげの管理をどちらがするかで問題となつたことがあります。なげの管理には、日常的な掃除などの管理だけではなく、場合によつては行き倒れ人の対処まであるので、双方とも相手の管理を主張して争い、藩の役人の裁許を仰ぐこともあります。

ともあれ、堤防とともに400年にわたつて城下町を守つてきたなげも、護岸工事によりほとんどがその姿を消してしまい、現在ではわずかに、安岡町から二宮にかけての堤防に残されるのみとなり、なげという言葉も失われつつあります。

ちなみに、神伝流泳法で知られる大洲（愛媛県）では昔からなげと呼んでいて、現在でも、なげという言葉が使われているそうです。

つやま 広報 10月

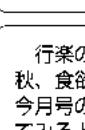
編集・発行

津市企画部行政広報室（市役所3階）
〒708-8501 岡山県津市山北520番地
TEL 0868-23-2111㈹ FAX 0868-32-2152
Eメール kouhou@city.tsuyama.okayama.jp
☆広報つやはホームページで閲覧できます
<http://www.city.tsuyama.okayama.jp/>

発行日 毎月10日

印 刷 株式会社 津山朝日新聞社印刷部

ベンネーム（鉄）は、鉄道マニアの別称。バスマニアでもある私が今回の特集担当、みなさんは津山から鳥取へ路線バスで直行できることをご存知ですか。バスでのんびり揺られると心は穏やかに。もちろん鉄道も。（鉄）



行楽の秋、芸術の秋、読書の秋、食欲の秋、スポーツの秋…。今月号の「つやまごよみ」を見てみると、遠出をしなくてもいろいろな秋が市内で十分楽しめそうですよ。仕事にも遊びにも体が2つ欲しいところです。（e）



8月中のひとの動き

人口 111,477人（前月比+40）

男 53,206人（同+19）

女 58,271人（同+21）

世帯 42,884世帯（同+67）

転入 290人 転出 273人

出生 95人 死亡 72人

（9月1日現在）

出ましたよ！ロックコンサート。いい年して往年のロックを披露させていただきました。島切れの早さにはショック。いつまで続くことやら。でも一番心配なのはあの「ウ音の中ノリノリだった子どもたちの体への影響。（X）

PRINTED WITH
SOY INK

R100

広報つやは、環境保護のため古紙配合半100%再生紙、大豆油インキを使用しています。読み終えた後はリサイクルにご協力ください。